

発行所  
 日本聖公会 東北教区  
 仙台市青葉区国分町2-13-15  
 TEL 022-223-2349  
 FAX 022-223-2387  
 URL <https://nssk-tohoku.com/>

シリーズ「東北の信徒への手紙」  
**イエスの深い憐れみ**

司祭 ステパノ 越山 哲也



深く憐れまれ」ました。

6章を読んでいくと興味深い事実が記されています。

「大勢の群衆を見て、飼いのいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた。」(マルコ6:34)  
 今年8月の主日はすべてヨハネによる福音書6章が選ばれました。ヨハネ福音書6章の冒頭には有名な「五千人の給食」が記されています。この記事は4つの福音書すべてに記されています。今年7月21日(特定11)にマルコによる福音書の記事が選ばれていました。冒頭の聖句はその一部ですが、イエス様は「飼いのいない羊のような有様を

深く憐れまれ」ました。6章を読んでいくと興味深い事実が記されています。お腹を空かせていた多くの人々が奇跡を目の当たりにして主を自分たちの王にしようとします。その人々の様子が次第に変化していきます。「わたしは天から降ってきたパンである」「わたしは命のパンである」という主の教えの真意を理解できず、弟子たちの多くは「実にひどい話だ。だが、こんな話を聞いていたらよいか。」とつぶやき、ついに離れ去り、共に歩まなくなりました。ヨハネ6章の最初と最後では人々の様子がまるで違うのです。

私たちが生きていくためには目に見える食べ物が必要で、人はパンだけで生きるのではないと聖書は語りますが、実際に限界に追い込まれた人にとっては今日を生きていくための食べ物、そして目に見える希望が必要なのです。

盛岡聖公会では地域の課題に寄り添っていくためのきつかけとなればという思いから「フードドライブ(食料支援・回収)」を実施しました。フードバンク岩手によると「想像出来ないかもしれませんが、学校の給食が頼りの子どもたちにとって夏休みはとても辛い期間なのです。そのため、夏休み中の食料支援の要請は通常の倍以上にもなります。」と報告されています。夏・冬休み前のフードバンク岩手への緊急支援要請は2021年で924世帯、2023年では1004世帯と年々増加しています。子どもたちの食の貧困問題は深刻で、体の健康はもちろん心の健康にも大きく影響を及ぼしています。

「実にひどい話だ」と言っています。子どもたちの食の貧困問題は深刻で、体の健康はもちろん心の健康にも大きく影響を及ぼしています。

て主のものを離れていった人々を、何て不信仰な人なのだと決して言えないと思えます。なぜなら、人々の置かれていた現状は大変厳しかったのだと想像するからです。満たされない時、人は絶望し自己中心的な行動、言動をしてしまうのです。ですからイエス様の言葉も彼らには届かなかったのです。そんな人間への思いが「深い憐れみ」という言葉に込められています。

飼いのいない「限界」に追い込まれた人々への深い深い思い、まなざしが向けられています。そして、私たち一人ひとりが日々しんどさを抱えながら生きていることも主は知っておられます。「私たちの日ごとの糧」が与えられ、お腹を空かせている人がいなくなる社会の実現こそが神の国のしるしです。「わたしは命のパンである」と言われた主のみ言葉が私たちの心に留まるためにも「神の国」の完成のためにあなたの存在を必要としてくださっている主からの招きに応えてまいりましょう。

(盛岡聖公会牧師)

## 奉仕職養成グループ主催研修会 「奉仕のススメ」part 7 開催

8月18日(日)午後1時から「奉仕のススメpart 7」が開催されました。2021年に始まりました「奉仕のススメ」は第7回を迎えます。今回は「召命に応えて」をテーマに、李贊熙司祭と有我忠幸聖職候補生にお話をしていた

いただきました。会場となった仙台基督教会におよそ16名、オンラインで15の会場からの参加がありました。ご参加くださいました皆様、関心を寄せてくださいました皆様、ありがとうございました。

二人は、幼少期のこと、ご家族から受けた影響、人との出会いや経験等、時にユーモアを交えて、時には当時の苦しい思いを思い起こすようにお話ししてくださいました。聖公会信徒のご家庭に生まれ、子どもの頃から教会に通われ

ていた李司祭。クリスチャンではないご家庭に生まれ育ち、学生時代や社会人での経験をを経てクリスチャンになられた有我聖職候補生。キリスト教との出会い、その後の信仰の歩みは異なるお二人ですが、様々な出来事を通して神様が呼びかけてこられたことに気づき、その呼びかけに

も神様が呼びかけてくださっているという恵みに改めて思いを巡らす時間となりました。李司祭と有我聖職候補生のお話は、奉仕職養成グループの不定期刊行物として教区の皆様にお届けする予定です。是非ご覧ください。私たちが各々が神様からの呼びかけに気づき、その呼びかけにどのよう

## 東北教区宣教協議会 開催

「2023年日本聖公会宣教協議会からの呼びかけ」を受けて、下記の日程で東北教区宣教協議会と、それに向けたオリエンテーションを開催いたします。「宣教協議会からの呼びかけ」を私たちはどのように受け止め宣教の歩みに活かしていくことができるのか、一緒に考えましょう。

### 東北教区宣教協議会

日時：2024年11月4日(月)9時~16時  
会場：仙台基督教会  
対象：各教会信徒代議員、教役者、部門長、幼稚園・こども園の代表者、関心のある方

### 宣教協議会オンラインオリエンテーション

日時：2024年10月6日(日)16時~17時  
10月7日(月)16時~17時  
(ご都合のよい日程にご参加ください)  
対象：宣教協議会に参加される皆さま

各教会へ案内が送付されますので、詳しくはそちらをご参照ください。

## 平和の祈り

〜平和の祈りコンサート〜  
十和田湖畔施設活用グループ パウリナ 中村 久美子

8月10日(土)午後1時から十和田湖畔鉛山聖救主礼拝堂にて平和の祈り聖餐式が行われました。深い緑と静けさに包まれた礼拝堂にて、北東北、そして弘前に観光に来ていた韓国の方々も李贊熙司祭さまと一緒に参加され、35名程の皆さんが平和の実現に向け祈りの時を共にしました。

礼拝後、ヴァイナル山荘へ移動し、ゴスペルシンガー山路ゆう子さんとシユロ東京のメンバー5名をお迎えし平和の祈りコンサートを開催しました。計画から3年目にして

などを演奏いただき、湖と緑をバックに山路さんの歌声、メンバーの方々の表情やコーラス、奏でる音そして歌詞に涙しそうになったり、弾む歌に心で踊ってみたり、最後には長谷川清純主教さまと越山哲也司祭さまがマイクを握り、交通状況により途中から参加になった仙台の皆さまも一緒に聖歌522番を歌い閉会となりました。

です。当グループの熱い思いが溢れ、湖畔側には特設ステージ、会場には金魚ねぶたや提灯、万国旗の装飾がなされ、自然の中に彩りが加えられました。曲目は山路ゆう子さん作詞作曲のゴスペルから聖歌390番「栄にみちたる」のアレンジ曲、聖歌540番「アメージンググレイス」と「ふるさと」のフュージョン

心と声を合わせひとつになった喜びと感謝に満ちた時でした。閉会時に降った雨が虹をプレゼントしてくれました。11月2日には閉所式、イベントを予定しています。ご一緒に参加しませんか。



# 北海道教区 ユースキャンプ報告



駒ヶ岳を望む大沼でカヌー体験

## 参加者の声

東北教区・盛岡聖公会

ガブリエル 中村 和 なごみ

今回のユースキャンプでは、

この夏は協働を進める北海道教区からお誘いを受け、北海道教区ユースキャンプに東北教区から青年2名(引率2名)が参加して参りました。今キャンプは大沼公園と函館聖ヨハネ教会、今金インマヌエル教会という函館を中心とした地域で開催され、北海道の広大な自然とアクティビティ、そして祈りの中で、2つの教区の青年たちは活き活きと交流し、その友情を深めることが出来ました。感謝を込めて報告いたします。

北海道教区のたくさんの人と関わることで、また普段の生活では体験できないことを大自然のなかで楽しく体験することができました。

キャンプ初日で印象に残っていることは、とても緊張していたことです。でもキャンプに参加するみんなと自己紹介やアイスブレイクをして楽しくお互いのことを知ることができ緊張もやわらぎました。二日目は楽しみにしていたカヌー体験のほか、臨床アート体験や主教アワー、BBQがありました。みんなで準備をしたくさん話をしながら仲を深めることができたBBQはとても楽しかったです。また、主教アワーでは、笹森田鶴主教の「なぜこの仕事についてのか?」のお話のなかに学生時代の話もあり大変興味を持ちました。三日目は函館聖ヨハネ教会で礼拝をしたあと、今金インマヌエル教会で礼拝をしました。今金の教会は自然のなかにあり、いつもと違う環境で新鮮な気持ちで礼拝に参加できました。

このユースキャンプを通じて新しいことを体験し様々な

年代の人たちと関わる楽しさを改めて感じ、とてもいい勉強になりました。笹森主教はじめ北海道教区のみなさん、そして送り出してくださいたい東北教区のみなさん大変ありがとうございました。

北海道教区・札幌聖ミカエル教会  
セシリア 成澤 穂香 ほのか

8月9日〜12日まで行われたユースキャンプに参加しました。北海道教区だけでなく東北教区の方々と一緒に過ごす事は初めてだったので、不安と緊張の気持ちが強かったです。でも、初日にアイスブレイクや自由時間でUNOや人狼などのゲームをする機会があったおかげで、すぐに皆と仲良くなる事ができました。

10日は、カヌー体験と臨床アートを行いました。臨床アートでは、函館聖ヨハネ教会の中村まゆみさんのご指導の下、クレヨンやスクラッチアートの表現手法を用いて絵を描きました。皆の絵がカラフルに描かれていて、とても綺麗でした。午後は主教アワーがありました。笹森主教様に皆が考えた質問に答えて

いただきました。好きな聖書の箇所や主教になった経緯についての他に、主教様のヘアスタイルについての質問もあり、とても盛り上がりました。主教様をより身近に感じる事ができた時間でした。

11日は、函館の教会見学や聖餐式を行い、他教派の教会も見学する事ができました。ハリストス正教会の建物や今金での聖餐式が印象的でした。今回のユースキャンプを振り返り、北海道教区の方々だけでなく東北教区の方々との交流できた事はとても良い経験となりました。今後も、様々な形で交流していけたらと思います。



主日礼拝後、函館聖ヨハネ教会にて



網走聖ペテロ教会



1891年、網走市大曲でマッチ工場の敷地内に最初の教会が誕生。教会は海外の文化に触れる機会となり、1918年に設立された愛香幼稚園は幼児教育の先駆けとなった(1977年閉園)。現在の聖堂は1999年に新築。当教会より、多くの教役者、信徒を全国に送り出している。2021年10月に宣教130年記念礼拝を行う。現在は少人数で礼拝を捧げているが、マッチ工場から始まった教会、聖霊の火が降って新しい展開が起こることを祈っている。

# 東北教区保育連盟 第50回 保育者大会

聖使幼稚園園長 クララ 中田 砂和子

8月1日から2日にかけて「ここをすまして、共に感じ、共に育つ」を主題に、東北教区保育連盟主催保育者大会が秋田で開催されました。

参加者は長谷川清純主教、各園のチャプレンと教職員、そして北海道教区から釧路領栄保育園園長前田博美先生が参加され、総勢97名となりました。

開会礼拝は大会チャプレン 渡部拓司祭の司式で行われ、長谷川主教より奨励を頂きました。会場は火気厳禁とのことでしたが、能代キリスト教会の皆様が電池式ローソクと美しい燭台を快く貸してくれさり、礼拝を彩ってくれました。感謝いたします。

1日目の研修は盛岡大学教授の石川悟司先生より、「保育者の専門性と感性について」の講話をいただき、保育者の専門性の本質は子どもを感じる力―子どもへの親和性であり、心の揺らぎを感じ取る感性を磨くことが大切であると学びました。現場をよくご存

じの石川先生は実例を幾つも挙げ、「保育の経験を重ねるうちに子どもを評価し評価されることに慣れ、様々な場面で解決を急いでいませんか」「子どもの心に寄せて、子どもをまつすぐ見ていますか」と会場に問われました。石川先生の飾らないお人柄や柔らかな口調に救われながらも、先生のお言葉は胸に刺さりました。

夜は夕食を兼ねた懇親会。秋田のご当地クイズで盛り上がりました。2日目、渡部司祭の司式により朝の礼拝が行われました。心を合わせて祈り、聖歌を歌い、聖書のみ言葉をきく。感謝と感動で胸がいっぱいになりました。

この日の研修では、以前聖使幼稚園に勤め、現在はおもちや専門店と学童保育を運営されている上松留美さんのお話を伺いました。上松さんが持参されたたくさんのおもちに触れ、学童保育や上松さんが視察した海外の幼稚園の保育を拝見し、子どもの自

ら育つ力を信じてサポートすることの大切さをあらためて感じました。保育の良いヒントをたくさんいただきました。研修後、保育連盟チャプレン八木正言司祭による閉会礼拝が行われ、続いて保育者大会のシンボルである木の十字架を来年度の開催地である弘前に引き継ぎ、大会を終えました。集う喜びと、共に祈り学んだ充実した2日間でした。この大会で得た学びをさらに深め、子どもの心に寄り添う保育を心がけていきたいと思っています。

大会に関わってくださった全ての皆様の温かいお支えに、心から感謝申し上げます。



# 広島平和礼拝2024に参加して

「決して当たり前ではない平和」  
その対極にあるものを通して

聖職候補生

パウロ 有我 忠幸

8月5日、6日の2日間を通して「広島平和礼拝2024」が開催され、そこで月下美孝さんによる被爆証言『平和の種まき』平和の実現は一人ひとりから、平和のためにつどい（カトリック教会との合同行事）、広島原爆逝去者記念聖餐式の3つのプログラムに参加してまいりました。

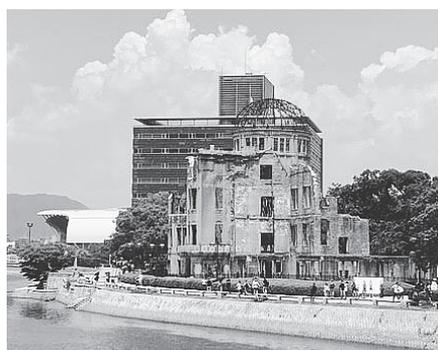
なかでも月下美孝さんの被爆証言は、その話し方に驚かされました。冒頭で原爆投下の朝の情景を、なんと腹話術をもって、相棒のしんちゃん（人形）と漫才かと思えるような語り口調で説明されていたのです。

『平和の種まき』平和の実現は一人ひとりから、というサブタイトルに示されるように、本当は悲惨な話を、笑いをもって淡々とお話しされるそのお姿は、まさしく自ら

平和を実現し、平和の種まきをされているのだと感じさせられました。

79年も戦争を経験していない現代の日本人にとって、平和は当たり前になっております。しかし多くの被爆した方々の証言などを通して、原爆によって日常を失った方々の絶望、悲しみに目を向けた時それは当たり前ではなく多くの犠牲の上に成り立っていることを知ります。

戦争は異なる立場の意見や利害の対立です。しかし互いの立場、環境などを思いやり、尊重できれば回避できるものです。その事を多くの人に伝え、私も平和の種まきをしていこうと思いを改にする2日間でした。





### 「父のこと、私のいま」

郡山聖ペテロ聖パウロ教会

ルーシー 加藤 まり子



父(オー

ガスチン

加藤彰介)

が亡くなっ

て6年にな

ります。仙台市の長命が丘にある聖ペテロ伝道所で葬送告別式を執り行っていたときでした。司祭様、信徒のみさまのお力で、無事父を送ることができました。

3カ月の闘病ですっかりやせてしまった父でしたが、伝道所に運ばれて、聖堂の高方から降り注ぐ光に包まれて、とても喜んでるように見えました。帰るべき場所に帰ってきたと。

父は、若い頃(終戦後)やさぐれていた時期があって、福島町の町をぶらついていたり、福島聖ステパノ教会の牧師さんに声をかけられて、教会に通うようになったと、私

に話してくれたことがありました。真摯に向き合ってもらい、自分の生き方を考え直すきっかけになったと。

そのような父のもと、私は幼児洗礼を受けて、郡山市にあるセントポール幼稚園に入園しました。幼いながらも、聖堂に入った時の敵かな雰囲気や清々しさは忘れられませんが、目には見えないけれど、イエスさまがいると知った時の大きな驚きと強い安心感、深く心に刻まれていきます。

父の転勤に伴い、郡山から、弘前、盛岡、仙台、会津若松と転校を繰り返しながら、私は育ちました。どの町にも聖公会の教会があり、優しく接していたいただきました。

このように書きますと、熱心なクリスチャン一家かと思われそうですが、実際は違っていて、日曜礼拝に家族全員で出かけることは少なかったです。残念ながら、父の理想は、実現しませんでした。私も自身も社会人になってからは仕事に追われて、教会を遠ざけていました。

父は退職後、熱心に教会に通いました。仕事人間で部下

を怒鳴りつける姿を見ていた私は、父が教会でうまくやれているのか心配に思うこともありました。

人間にはいろいろな側面があります。理想と現実がぐちゃぐちゃに絡まりながら、日々の生活はとどまることなく進んでいきます。父の中では、教会生活が一本の軸になり、毎日の心の整理の糸口になっていったようです。だから伝道所に安置された父が「帰ってきた」と言っているように私には思えたのです。

あの日以来、私にとって、教会はぐっと近いものになりました。祈りの場がもてること、そこに仲間がいることが幸せであると父に教えられたからです。

父に強く反発を感じることもありました。教会生活が気重に感じることもありましたが、そのような私ですが、退職し、両親を見送り、今ようやく肩の力を抜いて、教会に通えるようになっていきます。郡山聖ペテロ聖パウロ教会の一員として過ごすことができることをありがたく思っています。

### 主教コラム



USPG (United Society Partners in the Gospel) の主催するリーダーシップ

レーニングが、7月3日から23日まで栃木県那須塩原市にあるアジア学院を会場にして行われ、世界中から聖公会の青年たち9名が参加しました。国別では、イギリス、パプアニューギニア、バングラデシュ、ブラジル、パレスチナ、そして日本でした。

プログラム中頃の7月12日に、私はアジア学院を訪問し参加者たちに東日本大震災についてお話ししました。大地震と巨大津波と東京電力福島第一原子力発電所爆発事故による放射能被害、避難者のご苦労、13年4カ月後の現況等を、スライドと、最新の福島県地図と東北地図を広げながら、想像できているかを随時確認しながら説明しました。青年たちは熱心に耳を傾けて、時に目頭を熱くし、時に暗い顔をして痛みや怒り、悲しみ、

口惜しさの感情を表していました。彼らの感受性に接し、私は不思議と救われた思いで一筋の光を見ていました。

翌13日は朝から中型バスに同乗しての福島フィールドワークでした。福島県富岡町夜の森公園を経由して国道6号線に入り北上、車中から立入禁止の看板や倒れたままの家屋、大熊町で原発内の大型クレーンを目にしました。初めて訪れる震災遺構浪江町立請戸小学校に立ち寄り、英語のガイド書を読みながら、さび付いた建物を約1時間見学しました。日頃の避難訓練や津波に対する危機意識の重要性、また逃がっている人同士の助け合いが奇跡を生んだ事実を知って、衝撃と感動を受けたと話す青年がいました。最後に、新地町の祈りの庭で信徒の三宅信一さんから大震災後の教会再建の苦労話を聞き聖餐式を献げ、その後磯山聖ヨハネ教会でアイスをおぼり信徒との語らいを持ちました。この貴重な体験を今後の信仰に肉付けして、命の尊さを忘れずにと願ったことでした。

(教区主教)

